

う人は応分の負担をするのが当たり前じゃないか」という考え方でした。水は何もしなくても手に入ると思っている人にとっては、非常に腹の立つ話であったと思います。しかし、そういう考え方は決して日本になかったわけではありませぬ。結局その問題はいろいろな経緯をたどり、一時的にお金を集めてそれを森林資源の保全に使うという形で話が納まりました。私が理事長をしている財団に150億円ぐらい残っている基金の運用益で、森林の保全活動に関わる諸団体の活動に毎年数億ぐらい支援をしています。森林で有名な秋田県から申請がほとんど出てこないのが非常に残念なことです。美郷町からもNPOであれ、何であれ、もっともっと取り組んでいただきたいと期待を寄せています。

永田…企業が取り組む森づくりということで、現在、私が関係している仕事について少しお話をしたいと思います。神戸に神戸製鋼という日本を代表する大きな企業がありますが、そこで今

年、第一回森の絵本大賞というのを立ち上げ、兵庫県下の小学生と中学生を対象に、絵本の原稿となるお話を募集しました。絵本のお話というのは簡潔で趣旨がはっきりし、さらにストーリーがなければいけないなど、なかなか難しいのですが、たくさんの応募がありました。私も審査員になっていて、非常に面白いことに気が付きました。全く違う人が書いてるのに、お話の内容が非常によく似ている。これは今の日本の子どもたちの森に対する共通意識なんだろうなあ、と。主人公がまず夢を見て、夢の中に不思議な森が現れます。森の中に入っていくと、森の神様とか、王様と呼ばれる巨大な木が話すんです。「最近人間たちが森に入ってきてむやみに木を切り倒していくやがてこの森は消えてしまいうに違いなから、君は必ずこの森を守ってくれ」と望みを託します。主人公は、それぞれ別の森に帰ったり別の町に帰ったりして、みんなで森を守る活動を始めた、めでたし、めでたし。その後、

夢から覚めるというパターンが圧倒的で、6割はそれです。素晴らしいことには違いないのですが、私たちの世界では、夢の話というのは駄目なんです。お話として一番レベルが低く、誰にも言えることです。業界用語では「夢落ち」と言いますが、落ちが夢だというのは、ファンタジーでも絶対に駄目なんです。この物語で起きてる出来事は、こういう形で完結したと納得できないと、読み手も中途半端な気持ちになっちゃうんですね。

私が、描いてみたいという刺激を受けたお話があります。木が主人公で、お母さんが切り倒されてしまうんです。その後苗木が育っていくのですが、水に守られ、太陽に守られ、いろいろな動物たちに助けられながら大きくなっていきます。木が成長していく過程を自然科学的知識を背景にして淡々と語られているのが、おそらく大賞を取らるだろうと思います。まだこれは予想で、ほかの審査員さんもうらっしゃるので、すけれども、賞を取ることによって何か違ってくるだろうと私は思います。

佐々木大使や町田大使のお話にもあったように、単純に木を育てて守ればいいということではなく、木をどう暮らすの中に活かしていくか、ということが問われる時代になっていきます。子どもたちの中に「森を大切にしなければ」という意識は完全に根付いています。非常に心強いことですし、今までの教育の成果だろうと思っています。ここから先は、森と日本がどうやって



共存していくか。日本は本当に美しい森と水の国です。未来を担う子どもたちに、新しい森に対する意識を持ち、それを夢ではなく実践してもらうためにどんな役割を果たさなければいけないか、よく考えていかなければいけないと思います。私はまず美しい絵本をつくりたいと思っています。

**水を守るために、
これからのように
するべきか**

佐々木…水と森は美郷町にとって大きな資源であると同時に、先人から受け継

いできた貴重なものです。この二つを結びつけることとして、児童教育が挙げられます。水源涵養林など、既にいろんな形で進んでいるようです。こういった取り組みは、水と森の今後を考える上でいい手がかりになっていくと思います。大人の方について言いますと、先祖の皆さまに失礼にならないように、今の世代として後世に誇れるような形で水と森を利活用していくことについて、知恵を絞っていくことが求められます。

地域が活力を持つためには、「農業と林業の二つの場がそれなりに展望を持って動き出したという気持ち」を皆さんが共有されるのが非常に大事なことだろう」と思っています。先ほど触れた森林の保全活動も同様です。町役場のお仕事なのか、地域それぞれのお仕事なのか、あるいはボランティア団体のお仕事なのか、いろいろな考え方があろうかと思えます。町民の皆さんがこれからどういうふうな水と森に向かい合っていくのかについて思い切ったプランやアイデアを出していただくと、新しい展開につながるかもしれません。夢落ちではないかというお話がありましたが、それは絵本だけでなく、他の分野でも同じです。

秋田県の人は全体的に考えがあっても発言をためらってしまうようなところがありますね。ネットでどんどん情報を流し、全国から同士を巻き込みながら水と森の有り難さを宣伝しつつ新しい取り組みをしていただきたい。そ

れに若い人たちが関心を持つようになってくると、好循環につながると思っています。

これからの取り組みに、大いに期待を表明させていただきたいと思えます。町田・森と水、この二つを大事に保存していくのは「森や木に対して感謝と愛情を持つことではないか」と思っています。

私は、4年前まで山形の庄内に10年ほど住んでいました。庄内と秋田の行き来が非常に多かったのですが、日本海側沿岸を北上すると、庄内、酒田では松林、クロマツの美しい並木が見られます。しかし、秋田に入った途端に、松くい虫に食い荒らされて何とも無残な姿が続いています。同じように自動車のばい煙を吸って生きていますが、酒田の方はクロマツを何とか保存しようという間伐や栄養状態を考えて消毒するなど、老いも若きもボランティアとして力を合わせて取り組んでいます。このことから、「これからは我々住民が地域の森や木を、感謝と愛情を持って手をかけていくということが必要んじゃないかな」と感じました。これから地方財政がますます厳しくなり、地域資源をどう活かしていくのが日本の大きな課題になって、地方分権もこの延長線上で議論されるのだろうかと思っています。

自分たちのふるさとにある自然の資源をもう一度見直していくことが非常に大事なステージに入っているのではないかと、最近そんなふう感じてい

ます。

永田：私が住んでいる京都府の北の方に、美山という小さな山合いの集落があります。かやぶき屋根の集落が今も50軒ぐらい残っている素晴らしい景観で、四季を問わずたくさんの観光客が訪れます。入り口の大きなバスプール以降は車の乗り入れが禁止され、まるで昭和の初期のような光景が目の前に現れるんです。10月初めに訪れた際、もっぱら姿で野菜かごを持ったおばあちゃん」とすれ違いました。「美しいところですね」と話し掛けると、「そうなんですけれども、洗濯物が外に干せなくて」とのお話がありました。

美山の方々は相談し、過疎を「観光で生き残ろう」と決められたそうです。そのために不自由なことや嫌なことがあるかもしれないが、「この村で子どもたちが育ち、村を見放さずにここで暮らしてくれるために、自分たちが頑張ろう」と思われたそうです。

どんどん変わっていく時代の流れの中で、昔を今に留めることはできませんが、意識して保つことはできると思っています。昔の川遊びが楽しかったのであれば、もう一度それを作り上げたらい。川の流れを再現し、自然の草

を植え、大人にも水の中に足を浸す喜びを体験してもらえようなものを。そのためにはもちろん地域の協力がなくてはなりません。行政がやっても絶対にはまきません。美山のおばあちゃんのように「この美しさは私が守っている」という誇りと自覚が地域の方々にあるからこそ、あの美しい光景は維持されているのだと思います。

本当にここは美しいところです。それを知るためには一度は離れてご覧になればいいと思います。夏の京都で水を飲んでいただいたら、いかにこの水がおいしく、そして節水というこのの意味も学んでいただけるのではないかと思います。私たち今ここにいます。人間は、全て過去と未来をつなぐ役割を持っていきます。私たちは過去を知っていて、未来を予想することができません。私たちが知っている過去を、過去を知らない子どもたちに伝えていく役割が、大人にはあるのではないかと思います。

もう一回、取り戻せるものがここにはたくさんあると思っています。ぜひ皆さんの力で実現なさってください。それができるのを楽しみにしています。

美郷大使の皆さんからは大変貴重なご提言をいただき、誠にありがとうございます。町では、いただいたご提言を参考に、よりよい美郷の水環境の姿を目指します。